

アイルランドの国立公園制度について ～キラーニー国立公園成立の背景～

親泊 素子

江戸川大学国立公園研究所客員教授

はじめに

アイルランドは共和制国家で、国際連合ではアイルランドとして名前が登録されているが、1948年のアイルランド共和国法では、アイルランド共和国を国の記述とすることが定められている。現在の国の人口は約501万人(2021年)で、首都ダブリンには約143万人(2021年)の人々が暮らしている。かつては英国に征服され、英国の一部となっていた時代があったが、1921年に英国より自治領として独立、1922年には英愛条約が締結され、英連邦内の自治領「アイルランド自由国」となった。さらに1948年にアイルランド共和国法がつくられ、翌年の1949年に英連邦から離脱して正式に共和国として独立した¹⁾。このアイルランドの最初の国立公園となったのがキラーニー国立公園である。この国立公園は1932年に設立された。英国の国立公園制度誕生より17年も早くに作られていたことになる。丁度、日本の国立公園法が制定された翌年である。本論でアイルランドの国立公園を取り上げた理由は、かつては英国の植民地だったアイルランドが、英国より早い時期に国立公園を設立し、また、英国が採用した地域制の国立公園ではなく、アメリカをモデルとした営造物の国立公園制度をつくりあげたことである。そこでアイルランド初の国立公園となったキラーニー国立公園の成立過程について調査するとともに、アイルランドの国立公園の現状についてまとめてみた。

I アイルランドの国立公園制度について

アイルランドはヨーロッパ北西部に位置するアイルランド島に位置するが、アイルランドはこの島の83%を所有しており、残りの北東部分はイギリス領の北アイルランドである。アイルランド島はセントジョージ海峡を隔てて、イギリス本土のブリテン島と接しており、アイルランドとブリテン島とが近くに位置するた

め、アイルランド島もブリテン諸島の一部となっているが、この用語は議論的となることがある。アイルランド島はイギリスとアイスランドに次ぐヨーロッパでは3番目に大きい島である。島全体の面積は84,421km²で、北海道よりやや大きい面積であるが、アイルランドの国土面積は北アイルランドを除く70,273km²である。地形の特徴として、中央部の低い丘陵地は平均高度が100～300m位で、それを環状に囲む山地が海岸沿いに位置している。また、多くの河川が流れており、その河川沿いには大小の800近い湖沼が存在し、アイルランドの美しい自然景観を形成している。アイルランドが「エメラルド・グリーンの島」といわれるゆえんでもある²⁾。

アイルランドの気候は温帯に属しており、高緯度にもかかわらず、比較的温暖で降雪もほとんどみられない。しかし年間を通じて青天の日は少なく、曇りや雨の日も多い。雨量は偏西風の影響を受けて西部に多く東部は高い山々にぶつかって少なく、年間降水量も1,400mm、762mmと2倍の差がでるほどである。アイルランドの産業としては、穀物生産には不向きな土地の為、農地の8割が採草と放牧地で占めている。したがって、牛肉やバターなどの畜産物が重要な輸出品となっている。アイルランドの経済は、長い間、経済不況と移民による人口減少に苦しめられていたが、1990年代に入り、アメリカのIT企業などからの投資を受け急成長した³⁾。

アイルランドには現在、国立公園が6カ所ある。そのうちの5カ所は西海岸に位置しているが、1カ所だけはダブリンから約一時間行った東部に位置している。植物や自然景観の多様性に富んだ国立公園のほとんどが主な都市から日帰りで行けるような場所にあり、老若男女を問わず楽しめる場所となっている。北西のドニゴール県にはグレンベアー城で有名なグレンベアー、少し南西に行ったメイヨー県には大きな湿原を持つワイルド・ネフィン、ゴールウェイ県には湖に

表 I-1 アイルランドの国立公園

国立公園	英文名	地域(県)	面積(km ²)	成立年月日
グレンベアー	Glenveagh	ドニゴール	170	1984
ワイルド・ネフィン	Wild Nephin	メイヨー	150	1998
コネマラ	Connemara	ゴールウェイ	20	1990
バレン	The Burren	クレア	15	1991
キラニー	Killarney	ケリー	105	1932
ウイックロー山地	Wicklow Mountains	ウイックロー	220	1991

(出典：https://www.npws.ie/en/NationalParks/) (cited 2021/09/19)

たたずむ古城のカイルモア修道院で有名なコネマラ、クレア県にはアイルランドで一番小さい面積のバレン国立公園がある。また、西海岸を南下したケリー県には最古の国立公園のキラニーがある。アイルランドで最大の面積を誇るウイックロー山地はアイルランド東側に唯一位置する国立公園で、首都ダブリンの南にある⁴⁾。

国立公園を管理している組織は住宅・地方自治体・文化遺産省の国立公園及び野生生物局(National Parks & Wildlife Service)である。6カ所の国立公園の他に76カ所の自然保護区を有している。国立公園は国有地だが、自然保護区の中には民間団体や個人の土地所有も見られる。最も古い国立公園はキラニー国立公園で1932年に設立された。また、最も新しい国立公園はバリークロイ国立公園で1998年に作られた。この公園は設立当時の面積は110km²だったが、2017年にカイルタ製材会社管理の公園に隣接する針葉樹林40km²の土地がさらに国立公園に組み込まれ、名称もワイルド・ネフィンに改称された⁵⁾。したがってアイルランドの国立公園の総面積は680km²となっている。

II キラーニー国立公園の誕生

キラニー国立公園は、アイルランド西側の大西洋に面したケリー県南西部に位置している。レイン湖やマックロス湖等の美しい湖の他に、15世紀に建築されたロス城や19世紀に建てられたマックロスハウス等、自然だけではなく、アイルランドの貴重な歴史的建造物も残されている。また、ここにはアイルランドで最も広い面積の原生林も残されており、アイルランド在来種の野生のアカシカが生息している場所でもある。公園にはその他、希少動植物も存在しており、その生態学的価値の高さから、1982年にはユネスコ生物圏保護区(UNESCO Biosphere Reserve)にも指定された⁶⁾。それではキラニー地域が国立公園として成

立するまでこの地域はどのような場所だったのだろうか。

1. キラーニーの先史時代及び中世の歴史

キラニーは、約1万年前から、長い間森林に覆れていたアイルランドでも数少ない場所の一つである。4000年位前の青銅器時代からこの地域に人が住んでいた痕跡がみついている。ロス島で銅の採掘をした跡も発見されており、おそらく青銅器時代の人々にとっては重要な場所だったのだろう。国立公園の北部と東部の低地には先史時代の他の遺跡や考古学的なものも発見されている。その中にはリシビジーンストーンサークルも含まれている。また、7世紀にハンセン病だった聖・フィニアンによってつくられたレイン湖のイニスファレン島にある修道院跡も貴重な遺産である。公園内の森林は鉄器時代から、それぞれの時代に伐採や人の手が加えられた結果、公園内の樹種の多様性は徐々に低くなっている⁷⁾。

公園内の考古学的遺跡の中でも初期キリスト教時代に修道士の間で知られていたアイルランド初期の歴史を記録したイニスファレン年代記は注目に値する。おそらく11世紀から13世紀にかけて修道院で書かれたものと言われているが、イニスファレンはこの時代の学問の中心地であったため、「学習の湖」を意味するレイン湖(Lake of Leaning: Lough Leane)という名前が付けられたようである。やがてキラニー地域がノルマン人によって侵略されると、南マンスターを統治していたマッカーシー家は南ケリーと西コークに逃れそこでそれぞれ地方の部族の長となった。ノルマン人によるアイルランド侵略の後、湖周辺の土地はマッカーシー家とオドノファー家が所有するようになっていた⁸⁾。

2. ロス城

ロス城は15世紀にキラニー国立公園の中のレイン湖の端にオドノファー・モールによって要塞として建

てられた。1580年代に起ったデズモンドの反乱によってマーカーシー家の所有となったが、この城と土地をケンモア伯爵の子孫のヴァレンタイン・ブラウン家に貸したのである。この城は17世紀半ばにクロムウェルに侵攻された時、アイルランド軍が最後まで抵抗して戦った城として知られている。17世紀に増築され、後に復元されて現在は一般公開されているが、湖に面してそびえたつ城跡は、部族間の抗争が多かったアイルランドの歴史を垣間見ることができる⁹⁾。

3. マックロス修道院

マックロス修道院は、1448年にドナル・マッカーシーによってフランシスコ会修道士のために設立され、住民が襲撃された際に何度か破損したり再建されたりしたが今でも残っている。マンガートン山の「修道士の溪谷」は修道院が襲撃された時に逃げる場所だったと言われている。マックロス修道院の主な特徴は、中庭の中心にイチイの木が植えられており、アーチ型の回廊によって囲まれている。この木はマックロス修道院が建てられた時期と一緒に植えられたものだろうと言われている。この修道院は1654年にエドモンド・ラドロー総督が率いるクロムウェルの軍隊が押し寄せてきた時に焼かれてしまい、現在ではその古跡のみが残っている。この修道院は地方の酋長たちの墓地としても使用されていた。また、17世紀、18世紀のケリー出身の詩人たちもここに埋葬された。この修道院は、キラニー国立公園の奥深いところに建てられており、現在はその建物の屋根もなく、塔と小窓と回廊のみしか残っていないが、この風化した建物の苔むした壁は、アイルランドの初期キリスト教時代から長い間、修道院がこの国で重要な役割を占めていたことを物語っている¹⁰⁾。

4. マックロスハウス

マックロスハウスはヘンリー・アーサー・ハーバートとその妻で水彩画家だったメアリー・バルフォー・ハーバートによって1843年に建てられた。この邸宅はキラニー国立公園内のマックロス湖の近くに建てられ、その湖と邸宅と庭園とが一体となった風景は、かつてのアイルランド貴族の優雅な生活を思い起こさせる。このマックロスハウスは1899年にギネス醸造家のアルディラン卿の手に渡り、1910年にアメリカ人の実業家だったウィリアム・パウアーズ・ボーン2世によって購入され、最終的にアイルランド初の国立公園誕生のきっかけとなった邸宅である¹¹⁾。

マックロスハウスを建てたハーバート家とケリー県

とのつながりは1656年にはじまる。ウェールズのモントゴメリー家のトーマス・ハーバートが彼のいとこの為にこの土地を管理することになった。しかし実際にハーバート家で最初のマックロスの住人となったのは、その孫のエドワードであった。彼はケンモア卿の妹だった妻のフランシスと一緒に1735年当時マックロス半島に住んでいた。ハーバート家は18世紀にマックロス半島の銅鉱山で財をなした一族である。1770年にマッカーシーが亡くなってから、ハーバート家が初めてマックロスの土地の実質的な所有者となった。ハーバート家はここでエスタブリッシュメントとして、地元の活動や政治の世界で精力的に活躍し、さらにこの土地の整備を熱心に行った。ヘンリー・アーサー・ハーバートはトルク山に広大な植林を行い、1806年から1813年の期間はケリー議会の議員としても貢献した。1821年に彼の息子のチャールズ・ハーバートが亡くなった父の後を継いだのだが、その彼も1823年に妻のルイズ・ミドルトンと6人の子供を残して亡くなってしまった。その後、彼らの長男で、祖父と同名のヘンリー・アーサー・ハーバートが後を継いだ¹²⁾。

このヘンリー・アーサー・ハーバートはイートンで教育を受け、ケンブリッジのトリニティカレッジを1835年に卒業し、ヨーロッパ旅行中にローマでメアリー・バルフォーと出会ったのである。ヘンリー・アーサーとメアリー・バルフォーは1837年に結婚してマックロスに戻ってきたが、当初はトルク山のふもとにコテージを建てて住んでいた。1839年に現在のマックロスハウスのある場所に屋敷を建て始め、1843年にマックロスハウスを完成させた。この家はチューダー様式の邸宅で、スコットランド建築家のウィリアム・バーンによって設計された。ヘンリー・アーサーは1847年に議会の議員に選ばれ活躍していたが1866年に亡くなった。彼の死後、メアリー・バルフォーと二人の娘はロンドンへ引っ越した¹³⁾。

19世紀後半になるとハーバート家の財政状況が不安定となり、1897年にハーバート家は融資を受けたスタンダード生命保険会社へのローンの支払いができなくなり、一年後にその邸宅と土地が保険会社に没収されてしまった。そしてついにハーバート家とマックロスとの関係が終わりを迎えるのである。スタンダード生命保険会社は1899年11月21日にダブリンでマックロスハウスを競売にかけたが落札されず、11月29日にようやくギネス醸造家でアイルランドのユニオニストだったアルディラン卿によって購入された。アル

ディラン卿はもともと彼の妻がヘンリー・アーサー・ハーバートの姪だったというつながりで購入したのだが、実際に彼がマックロスを利用したのは年に数回で、狩猟や魚釣りで使用する程度であった。ハーバート家のこの破たんは、1861年にビクトリア女王の訪問に備え大幅な改修を行い、この時の散財がハーバート家の財政を逼迫させたのではとも言われている¹⁴⁾。

5. キラーニー国立公園の誕生

マックロスは1910年にアメリカ人実業家のウィリアム・バウアーズ・ボーン2世の手に渡った。彼はアメリカのエンパイア鉱山の所有者で、北カルフォルニアのスプリングバレー水力発電会社の所有者でもあった。彼は一人娘のモードの結婚祝いとしてマックロスを購入したのである。購入してから1932年まで20年以上にわたり、11万ポンドを費やして敷地を整備した。1915年にはサンケン庭園、ストリーム庭園、ロックガーデン等をつくった。モードの夫のアーサー・ローズ・ヴィンセントはマンセスター地方クレア県出身の英国系アイルランド人だった。彼らの間に2人の子供ができたが、1929年にモード・ヴィンセントは肺炎にかかって亡くなった。その後、彼女の夫と子供たちはさらに3年間、このマックロスに住んでいたが、1932年に夫のヴィンセントとモードの両親は彼女への思い出として、マックロスの邸宅と土地(マックロス・エステート)をアイルランド自由国に寄贈することを決め、ヴィンセントは1932年7月にエイモン・デ・ヴァレラ大統領に書簡を送った¹⁵⁾。

ヴィンセントは前政権と交代したばかりの共和党(フィアナ・フォイル)エイモン・デ・ヴァレラ大統領に、この場所を国の誇るべき公園とすることを条件に、マックロス・エステートを国に寄贈することを伝えた。ヴィンセントとボーンは、世界情勢が変わって行く中で、こういった広い敷地を個人が管理することは難しいと考えたのである。もし現状を維持し続けることができれば、世界でも稀にみる自然美を人々に提供できるだろうとも付け加えた¹⁶⁾。

ヴィンセントはデ・ヴァレラ大統領と委員会の委員を館に招待して宿泊させ、敷地を案内した。デ・ヴァレラ大統領は即日、ヴィンセントの寄贈を快諾し、すぐに司法長官のコーナー・マッグワイアーをヴィンセントの元へ訪問させた。司法長官はロックガーデン、森林、科学的に経営されていた農園、そしてこの国唯一の純粋なケリー牛種に関しては詳しく報告したが、在来種のアカジカや狩猟地に関しては触れなかった。

ヴィンセントは国の弁護士にこの不動産の維持管理費だけでも11万ポンドかかることを伝えた。また、従業員も65人おり、彼らには地方公務員並みの給与が支払われているとも伝えた。さらにこの湖水地方の敷地全体を取得するためには、ケンモア卿の不動産の一部も取得する必要がある、その中でも特に山間部の広い土地は取得すべき地域であることを強調した¹⁷⁾。

ボーンとヴィンセントが政府に寄贈しようと思った強い動機は「この場所の美しい自然美を保護し、それを公衆の為に役立って欲しい」ということであったが、ヴィンセントが今まで心を込めて管理してきたこの土地を国がこれからどのように管理していくか、この領地に住む住民たちをどうするかについての具体的な議論がなされることはなかった。マックロス・エステートの建物を魚釣り、狩猟に利用すること等の提案はなされたが、世界恐慌のさなか、この地がアメリカや海外からの利用者呼び込むことはあまり現実的な提案とは思われなかった。政府の土地局森林課はむしろ、国立公園として設立しても、公園利用を妨げることなく商業用の植林をここでできるだろうと考えていた。そうすれば国立公園の維持管理費用を低く抑えられるだろうと見積もっていたのである¹⁸⁾。

寄贈された43.3km²のマックロス・エステートは「ボーン・ヴィンセント・メモリアルパーク」と改名された。また、同年に「ボーン・ヴィンセント・メモリアルパーク法1932年」を制定することによって、国立公園を誕生させたのである。ボーン・ヴィンセント・メモリアルパーク法には「この公園を国立公園として、人々のレクリエーションと娯楽の為に利用できるよう、政府が維持管理すること」が記載されている。したがって、現在でもこのメモリアルパークが国立公園の中心部となっている。こうしてアイルランドで最初の国立公園が誕生したのである¹⁹⁾。

具体的には、1932年12月15日に議会を通過し、国王の承認を得た次の日の12月16日に法案が成立した。そして、1932年12月31日にウィリアム・バウアーズ・ボーン夫妻及びアーサー・ヴィンセントによってマックロス・エステートは正式に国に寄贈された。細かい譲渡の法的手続きはボーンによってなされ、未購入だった土地も最終的には五万ポンドで資産管理会社からボーンが買い取り、「ボーン・ヴィンセント・メモリアルパーク」として国に譲渡した。また、この法には公園内に亡くなった娘の記念碑を建てて残すことや、この譲渡に対してかかる税の控除やその他の法的

手続きの費用等についても含まれていた。これらの不動産に加え、不動産管理の建物や、すべての家具、農機具や農具、牧場等、約8,500ポンド近い額に相当する所有物も国に寄贈された。さらに、ポーンもヴィンセントも今いる従業員の給与をそのままの状態で払い続けることを繰り返し頼んだ。正式の認可を待つ間、役人のN・オッコーナーは国立公園として維持するために政府がやるべき点を列挙していたが、この公園維持について考えると、現在の政府の公共事業を担当する課だけでは不十分だと感じた。アイルランド政府は実際、マックロス・エステートが寄贈された後、この公園を財政的に支援することができず、長い間、作業農場として運営していた²⁰⁾。

このマックロス・エステートをアイルランド自由国に寄贈したことに関しては、自然美の保全、それらを開発から守り、人々がこれらのウィルダネスや自然景観を将来の世代にわたって楽しめるよう保全するというアメリカの国立公園の考え方にかなり影響されていた。特に人々がこれらの場所にアクセスできることがとても大切であるという事が含まれていた。ウィリアム・パワーズ・ポーン2世はカルフォルニアのシェラネバダ山脈のヨセミテ国立公園の熱烈な支援者であり、ヨセミテを私的利用によって開発されることを抑えることが、彼にとっての使命でもあった。義理の息子もマックロス・エステートに関して同じ気持であった。ヴィンセントの息子によると彼の父も祖父もヨセミテのようなアメリカの国立公園に精通しており、その考えがこのマックロス・エステートを寄贈するに至ったのだとみている。ポーンもヴィンセントも傑出した自然美を持つこのエステートが個人に渡すことは間違いであると考え、これを国に寄贈し、多くの世代に受け継がれていくべきだと考えた。ポーンとヴィンセントの寄贈がイギリスのナショナルトラストのような寄贈と異なっていた点は国が所有するという点であった。これは英国の伝統を変えるものであり、後にアイルランドのスポーツや土地エステートの考えに影響を与え、それが将来のアイルランドの国立公園設立へとつながっていったのである²¹⁾。

「ポーン・ヴィンセント・メモリアルパーク法」が成立してまもなく、ヴィンセントはアイルランド自由国が直面している今後の政治の動向が気にかかっていると記者団に語った。彼は共和党の土地政策に対しやや懐疑的な気持ちを持っており、当時、この共和党は英国からの完全な独立を模索していると伝えられたからである。また、ヴィンセントは野党国民党のクマン

ナ・ゲールにもあまり良い印象を持っていなかったが、そのリーダーのW. T. コスグレイヴは尊敬していた。ヴィンセントはコスグレイヴと納付及び納税者組合のリーダーだった彼の友人のフランク・マックダーモットの下に人々を結集し、国民党を結成し、最終的にはデ・ヴァレラ政権を倒すことを期待していた。共和党の機関紙アイリッシュ・プレスはすぐさまこれに反応し、ヴィンセントの提案をはねのけた。ヴィンセントの考えは国民党にも共和党の考えともうまくなかった。ヴィンセントはケリー州のディングル半島にあるアナスコール村の共和党地方支部に新たなアングローアイリッシュ・ユニオニスト党を設立することを非難され、共和党の機関紙のアン・フォブラクト紙はヴィンセントがマックロスを寄贈する見返りとして、実はこの国のリーダーになりたかったのだと非難した。妻のモードの命日にあたる1933年2月12日に記念の式典が行われるはずだったが、1933年1月1日に式典なしで最後の譲渡が行われた。また、その前日にはマックロスの従業員が政府の職員となるための契約の署名が行われた。従業員だったフェルプシャはマネージャーとして残り、ヴィンセントは全ての従業員に別れを告げ、英国へと旅立っていった。これらの行動はヴィンセントの心からの寄贈であり、たとえ彼が現政権を嫌っていたとしても、彼はヴァレラ大統領が、彼の愛するマックロス・エステートを守ってくれることを願っていたのである²²⁾。

譲渡が行われた翌日、デ・ヴァレラは真夜中に議会を解散し、すぐに行われた選挙で再び政権に返り咲いたのである。ヴィンセントが公共事業局を通してポーン・ヴィンセント・メモリアルパークを託した政権は考えていた以上にしたたかな党であった。しかし、政府はこういった流動的な政治情勢の中でこの不動産を取得したために、なんらこのメモリアルパークを管理するための明確な政策を持っていなかった。管理のおおよそは把握していたが、農務や可能であればマックロスハウスを商業利用でのシカ狩りや狩猟等に用いようと考えていた。これらの目的を付け加えることで、政府はこれらの自然や美しい景観保護を約束したのである。この場所の一部を除いて、一般の人々に利用させることが寄贈者の願いでもあったのだが、できて10年も満たない新政府で、しかも世界恐慌のさなか、経済的な理由もあり、これらの条件は受け入れざるをえないことであった。政府にとってはゲーム狩猟による経済的利益を頭に描いていた。したがって法律には観光や地元の雇用を促進するための商業的価値からの保護を目的とするということも書かれていた²³⁾。

やがて、1969年にアイルランド政府は、国立公園の分類と管理に関する保護地域についてのIUCNカテゴリーIIに対応した国立公園として、キラニー国立公園の拡大及び再指定を行うことになった。また、アイルランドの他の国立公園を設置することも決定された。三つの湖の他に、キラニー・ハウス、ロス島、イニシャファレン、グレナ、ウラウンズ、プーラガワーのタウンランド等、ほぼ60km²の面積が元の公園に追加された。現在では1932年の倍以上の大きさの面積となっている。アイルランド経済が豊かになり、国立公園の役割についての認識が変わると、公園で利用できる資金が格段に増えたのである²⁴⁾。

国の所有となって以来、1964年迄マックロスハウスは閉鎖されていたが、公園と庭は公共の為に利用されていた。アーサー・ローズ・ヴィンセントは彼が亡くなる1956年までずっとマックロスに関心を向けており、彼の死後、キラニー近くの墓地に埋葬された。彼の息子のウィリアム・ボーン・ヴィンセントも同様、生涯を通じてマックロスとつながっていた。さらにヴィンセントとモードの娘、エリザベス・ローズ・ヴィンセントの子供で、ウィリアム・ボーン・ヴィンセントの姪にあたるフルール・メルヴィル・ガードナーも彼女がなくなる2011年まで何度もマックロスに足を運んでいた²⁵⁾。

Ⅲ 二人の立役者：ウィリアム・パウアーズ・ボーン2世とアーサー・ローズ・ヴィンセント

マックロス・エステートを寄贈し、アイルランド初の国立公園設立を提案したウィリアム・パウアーズ・ボーン2世とアーサー・ローズ・ヴィンセントとはいかなる人物だったのだろうか。まずは二人の生い立ちを明らかにしてみよう。

1. ウィリアム・パウアーズ・ボーン2世(William Bowers Bourn II)の生い立ち

ウィリアム・パウアーズ・ボーン2世は1857年5月31日にカリフォルニア州のサンフランシスコでウィリアム・パウアーズ・ボーンとサラ・エスター・チェイスの2番目の子供として誕生した。父親はゴールドラッシュで富を蓄財した資産家だった。サンフランシスコで教育を受けたのち1875年にイギリスのケンブリッジ大学へ進学した。しかし、前年に亡くなった父のあとを継いだ母親が事業をうまく回すことができず経営難に陥った。そこで息子のボーンは学業半ばの1878年にイギリスから戻り、母親を助け、エンパイ

ア鉱山を立て直し、グラスバレーに銀行も設立し、サンフランシスコガス会社の代表にもなった。しかし、1887年に鉱山を売却し、翌年にE・エベレット・ワイズや他の投資家と一緒に手を組み、ネパバレーに巨大なグレイストーンワイナリーを建設した²⁶⁾。

1902年にサンフランシスコガス及び電力会社の社長に就任、そして3年後に最後のライバル会社を吸収してパシフィックガス及び電力会社を打ち立てた。1908年に彼の多くの資本を今度はスプリングバレー水力発電会社に投入した。大きなダムや貯水池を持った会社で、5つのベイエリアの地区にパイプラインを通し、スプリングバレーはサンフランシスコの水力を70年近くまかなったのである。一方、1901年にサンフランシスコ市長のフェランがヘッチ・ヘッチー溪谷とエレノア湖にダムを建設し、パイプラインを引いて市に水を引く計画を発表し、ダム建設の権利を申請していた。しかし1903年に内務省長官のヒッチコックはその申請を退けた。ところが、1906年にサンフランシスコで大地震が起こり、地下に埋設されていた水道管が破壊され、消火栓からの水が出なかったことから、地震後の火災の被害が拡大し、ボーンの水力発電会社に対して多くの市民の不満が噴出した。市長のフェランはヒッチコック長官の決断を非難し、彼らの人脈を利用して水面下で交渉を続け、ついにフェランの計画は成功し、1934年にはサンフランシスコにヘッチ・ヘッチーからの水が供給されるようになった。ボーンは彼の多くの資産をスプリングバレー水力発電会社につき込んできたが、撤退を決め、その利権をサンフランシスコ市に4,100万ドルで売却した。その頃にはすでにボーンは一線から身を引いていたのである²⁷⁾。

ボーンの家はサンフランシスコ大地震後にカリフォルニアの半島に引っ越した。1908年から1917年のフィロリに引っ越すまで、彼らはサン・マテロのクリスタルスプリングレイクに隣接したクロッカー不動産所有の「スキーファーム(後にスカイファームとして知られる)」を借りて住んでいた。その間、ボーンは家族を連れてヨーロッパの旅へよくでかけていたが、1906年に一人娘のモードが船中で英国系アイルランド人のアーサー・ローズ・ヴィンセントと出会い、1910年3月20日にサン・マテオの教会で結婚式を挙げたのである。その後、カリフォルニアで2週間の新婚旅行を楽しんだ後、3カ月のヨーロッパとエジプトの旅へとでかけた。だが、前年の1909年10月から1910年1月の間、ヴィンセントはアフリカのザン

ジバルに次席判事として勤務していたために、ボーンは一人娘をアフリカへ行かせることを嫌がり、娘たちが新婚旅行から戻ると、その年の11月にアイルランドケリー県のマックロスとその周辺の土地11,000エーカーを購入し、結婚のお祝いとして贈り、この敷地の整備を開始した。それから、ボーンはしばしばここを訪れるようになった²⁸⁾。

一方、サンフランシスコから南に40km 程行ったクリスタルスプリングレイクの会社所有の土地がマックロスの景観と似ていたところから、ボーンはそこにマックロスをモデルとした邸宅を建設したいと思った。しかし、ボーンがその会社の代表取締役とはいえ、サンフランシスコに水を供給している公共性から、個人での土地所有が許可されず、彼はできるだけその湖に近い土地を探し、1915年に1,800エーカーの土地を購入した。早速、長年の付き合いをしていた建築家のウィリス・ポークに家の設計を依頼した。1917年秋の完成前にボーン夫妻はそこに入居し、その屋敷の名前をFight-Love-Liveの頭文字を取ってフィロリ(Filoli)と名付けた。しかし、1921年にボーンは心筋梗塞を引き起こし、不自由な身となり、それからほとんどの時間をフィロリで過ごすようになった。1922年再度の心筋梗塞を引き起こし、この頃から車椅子の生活になっていった²⁹⁾。

1922年にボーンの妻はヒルボロー庭園クラブを設立し、アメリカのガーデンクラブの会員にもなった。こうしてフィロリの庭でしばしば優雅な茶会が開かれるようになった。また、1924年にはペブルビーチにジョージ・ワシントン・スミスの設計によるスペイン風の家を娘の為に建て、名前をアシロ(Asilo)と名付けた。しかし、娘のモードが二人の子供を連れて、ボーンに会いに行くためにアイルランドからニューヨークに渡った1929年2月12日に肺炎で亡くなるという悲しい事件がおこった。彼女の遺体は電車でニューヨークからカルフォルニアのフィロリに運ばれ、家と丘が見下ろせるところに埋葬された。娘の死後、ボーンはだんだんとビジネスの世界から引退していった³⁰⁾。

1929年にエンパイア鉱山はニューモント鉱山会社に25万ドルで売却され、その一年後に今度はスプリングバレー水力発電会社がサンフランシスコ市に売却された。1932年にボーンとヴィンセントはアイルランド自由国に娘のモードを偲んで、マックロス・エステートを寄贈することを決めた。その同じ年、今度は

ボーンの妻が糖尿病から病気を発生し、ベッドに寝たきりの状態となってしまった。この頃ボーン夫妻に替わって、ボーンの妹たちがフィロリでパーティや舞踏会を開いていた、1933年11月24日がボーン家によって開かれた最後の晩さん会となった。しかし、その日もホストを務めたのは妹で、ボーン夫妻は2階の部屋にいて晩さん会には降りてこなかった。1936年1月3日ボーンの妻は75歳の生涯を終え、半年がたった7月5日に今度はボーンがフィロリで79歳の生涯に幕を閉じた³¹⁾。

2. アーサー・ローズ・ヴィンセント (Arthur Rose Vincent)

アーサー・ローズ・ヴィンセントはアイルランドのマンスター地方クレア県出身の英国系アイルランド人で、本人はインドのマディア・プラデーシュで生まれた。父親はイギリス軍の第三騎兵連隊の大佐であった。三歳の時にインドを離れ、後にパークシャイアーのウエーリントンカレッジ、パリのフランスカレッジ、ダブリンのトリニティカレッジで教育を受け、ダブリンの法科大学院で法廷弁護士の資格を取得した。1903年に外務省司法サービスに勤務し、イギリス領東アフリカに行政長官として派遣された。その後、1908年に上海にあった中国及び韓国担当の英国最高裁判所の次席判事として勤務した。マックロスに住むようになった1915年には治安判事としてケリー県の長官となったが、1919年には、大英帝国勲章司令官に任命され、英国情報省のシカゴ代表を務めた。ヴィンセントは1931年から34年までアイルランド議会上院で無所属の議員として活躍した。1931年にパトリックW・ケニーの補欠選挙で当選し、その後の選挙で9年の任期で選ばれたのだが、健康を理由に1934年2月21日に辞任した。その後、彼のかわりにパトリック・リンチが選ばれた。マックロス・エステートを寄贈後、1937年にアイルランドを離れ、モナコへ移住し、そこで余生を送った。第二次世界大戦の間はアイルランドに戻っていた。ヴィンセントは1956年9月24日に80歳の人生に幕を閉じ、彼の遺体はマックロスハウスのそばのキラニーに埋葬された³²⁾。

IV 国立公園成立の要因

アイルランドで戦前に建造物の国立公園が成立した要因は、キラニーのマックロス・エステートをウィリアム・パワーズ・ボーン夫妻とアーサー・ローズ・ヴィンセントが国に寄贈し、国立公園の設立を願い出

たことがきっかけであった。また、彼らが国に寄贈した動機は、ボーン夫妻の一人娘で、ヴィンセントの妻であったモード亡きあと、この地を彼女への思い出の場所として永遠に残したかったからである。また、最愛の一人娘を失くし、ボーン自身も二度の心筋梗塞から体も不自由になっており、このマックロスに来ることはなくなっていた。また、世界恐慌が始まり、ボーンは次々に事業を手放し、財政的な整理を始めていた。そこで、ボーンはヴィンセントにマックロスの売却を相談したが、この土地が民間の手に渡り分割売却されていくことを見るのは忍びないとの思いから、「ボーン・ヴィンセント・メモリアルパーク」の設立を政府に願い出たのである。

この頃、ヴィンセント自身の健康も思わしくなくなっていた。妻のモードを失くした悲しみだけでなく、ヴィンセントは当時の政権に満足していなかった。英国系アイルランド人の彼は、もともとユニオニストであったため、英国に対して強硬に独立を主張していたデ・ヴァレラ政権に不安を感じていたのである。ヴィンセントはデ・ヴァレラ政権が選挙で負けることを期待していたのだが、一夜で返り咲き、自分の政治的信条と異なると感じ、政治の世界から手を引くことを考えていたのだろう。ヴィンセントがマックロスを寄贈した頃は、まだ、議会の議員も務めていたが、健康を理由に任期終了を待たずに辞任している。その後1937年にヴィンセントはアイルランドを離れ、英国に渡り、その後モナコへ移住した。

さらに、ヴィンセントの息子のウィリアム・ヴィンセントはこう回想している。祖父のボーンも父のヴィンセントもアメリカの国立公園について深い理解を示しており、特に、ボーンはヨセミテ国立公園のヘッチ・ヘッチー論争の時に、ジョン・ミューアと共に自然景観の保護を訴えて一緒に戦った仲間の一人だった。だからこの美しいキラニーの自然を守るためにどうすればよいかを考えた時に、ヨセミテ国立公園の自然保護のイメージがわいてきたのだろうと。

ボーンは当初、自分の所有するスプリングバレー水力発電会社の利権を守ることを目的として、ミューアの自然保護運動に参加したかもしれない。しかし、徐々に功利主義的自然保護の考えから最後は純粋にヨセミテに深い愛情を持つようになっていた。またミューアだけでなく、ボーンは長年の付き合いがあった建築家のウィリス・ポークの影響も受けていた。ポークはボーンの家やフィロリの邸宅等、ボーンが

所有する多くの建物の設計を長年にわたってかけており、自然保護団体のシェラクラブとも深いかかわりをもっていた。シェラクラブの初期のロゴをデザインしたのもポークで、シェラクラブの活動に強い関心を示していた。したがって、ボーンはジョン・ミューアやウィリス・ポークといった人々との長い付き合いを通して彼自身も自然保護思想を高めていった。

また、アイルランドには英国のナショナルトラストのような民間の保護団体がその当時にはなかった。英国ではすでに1895年には非営利団体のナショナルトラストが設立され、貴族の館、城、庭園などの自然・歴史遺産の保全が民間の手で行われるようになっていたが、アイルランドは長い間独立問題で国内も混沌としていたために、こういった保護団体がつくられる余裕もなかった。そのため、国に寄贈するのがマックロス・エステートを保全できる最善の策だったのだろう。アイルランドでナショナルトラスト団体ができたのは1948年だが、その設立総会には英国ナショナルトラストから講演者を呼ばず、アイルランドと似たような境遇にあったスコットランドのナショナルトラストに講演の依頼をしたのである³³⁾。アイルランドが英国から離脱して正式に独立したのは、翌年の1949年のことだった。

アイルランドの最初の国立公園はアイルランドが自由国になり、更に完全な独立を追い求めている時代に設立された。政治情勢としては、自由国になったが、まだ国内ではいくつもの政治グループによるナショナリズムの戦いが起っていた。したがって、寄贈しようとしていたヴィンセントもその動機が疑われた。しかし、政治的信条において同意できない新政権にマックロス・エステートを寄贈することに多少のためらいがあったにもかかわらず、国に寄贈しようとしたのは、経済的な理由に加え、キラニーの傑出した風景をそのままの形で永久に残したいという国立公園の理念を義理の父親ボーンと共有していたからではないだろうか。

おわりに

アイルランド初の国立公園となったキラニー国立公園は1932年に成立した。次に国立公園ができたのは1984年で半世紀以上が過ぎてからである。アイルランドは1969年のIUCNで定義されたカテゴリーIIの国立公園の基準に沿って国立公園設立の準備を始め、1984年にグレンベアー国立公園を設立した。そ

の後、1990年、91年と立て続けに3カ所の国立公園を作り、6番目のバリークロイ(後のワイルド・ネフィン)国立公園を設立したのは1998年のことである。このアイルランドの国立公園制度の整備が遅れた大きな原因は、英国から国が独立してからも経済的困難が続いていたからだ。ようやく1958年から始まった海外からの企業誘致の工業化政策で、経済の発展をみるようになった³⁴⁾。また、北アイルランド問題も残っており、その問題にめどをつけたのが1980年代で、それから経済の基盤を作り始めたのである³⁵⁾。その間、ずっとアイルランドの政治は不安定で、経済も厳しい状態が続いていた。また、1929年の世界恐慌や第二次世界大戦、戦後の北アイルランドとの動乱そして1973年のオイルショックなど、数々の世界的経済不況の中で、ようやく国としての体裁を整えてきたアイルランドにとっては、国立公園の整備というのはまだ国がなすべき上位に位置づけられる制度ではなかった。

6番目のバリークロイ国立公園が出来てからすでにまた20年以上が経過しており、その間、アイルランド国内では、国立公園が十分、レジャー・レクリエーション利用に活かされていないという批判がでてきている。そのため、国立公園の整備予算を増やし、観光の活性化と促進を図る動きがでてきたが、自然保護団体からは、利用整備をする前に、公園内の保全問題を解決することが先決だろうという指摘もされている。さらに、国立公園法の制定、公園管理官等のスタッフの増員、生物多様性保全の為の財源確保等を優先すべきであると訴えている³⁶⁾。国立公園用地としての土地取得後も引き続き牧草地の利用等を許可しているが、レンジャーのいない公園もあり、過剰放牧や泥炭採掘、外来種問題等、農用地の利用に対する規制や生物多様性の保全がうまくいっていないと指摘する声もある³⁷⁾。

アイルランドの国立公園は、美しい山々、沼地、湖、草原、森林等とともに古城、修道院等の考古学的遺跡も数多く残されており、また、引き続き放牧等の農地利用もされている。これらの景観要素が一体となってアイルランド特有の美しい景観を創出している。アイルランドには6カ所の国立公園の他に76カ所の自然保護区が指定されているが、自然保護区には民間団体や個人所有の土地も残されている。現在、アイルランドではキラニー国立公園だけがポーン・ヴィンセント・メモリアル法で管理されているが、残りの国立公園は、アイルランド国有財産法、野生生物

法、EU生息地指令等といった複数の法制度の下で公園管理がなされているが、これらの法律だけでは不十分である。数年前から政府も国立公園の保護と利用問題に真剣に取り組み始め、2017年にはバリークロイ国立公園の見直しが行われ、面積の拡張が行われるとともに、国立公園名もバリークロイからワイルド・ネフィン国立公園へ改名された。また、今年、2021年に入り、国立公園及び野生生物局の組織の見直しも行われることとなった³⁸⁾。

アイルランドはイギリスのカントリーサイドと似た風景も多く、IUCN カテゴリー Vの景観保護地域の分類に近いと言われているが、最初の国立公園キラニーから今日に至る迄、ずっと営造物の国立公園を作り続けていることは興味深い。隣国の英国では1949年に国立公園制度ができると、1950年代には10カ所の国立公園を地域制の形で指定した。したがって、同じような自然・文化遺産を公園内に持ち、牧畜、農業、林業といった人の手が加わった多くの私有地をかかえていたアイルランドでも、英国と同様の制度を適用すればもっと多くの国立公園を設立できたかもしれない。しかし、あくまでIUCN カテゴリー IIの国立公園を基準とした営造物の国立公園をつくることを貫いてきた所にアイリッシュナショナリズムを感じるのである。

引用文献

- 1) アイルランドの基礎データ/外務省.
<https://www.mofa.go.jp/mofa/area/ireland/data.html/#section>, (cited 2021/06/08)
- 2) 「アイルランド」の解説、ブリタニカ国際大百科事典小項目.
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%AB%E>, (参照 2021/06/08)
- 3) アイルランド：百科事典マイペディア「アイルランド」の解説.
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%AB%E>, (参照 2021/06/08)
- 4) National Parks & Wildlife Service. <https://www.npws.ir/national-parks> (cited 2021/06/08)
- 5) ワイルド・ネフインはバリークロイから2018年にこの名称に変更された。また、その時に面積も拡張されたのだが、国立公園及び野生生物局のホームページは昔の数字が表示されている。こちらの表は訂正後の数字である。国立公園及び野生生物局に直接メールで問い合わせをして確認した。(mail

- date 2021/09/22)
- 6) Ibid.
 - 7) History of Killarney.
<https://moractivetours.com/blog/history-of-killarney/>, (cited 2021/06/08)
 - 8) Killarney National Park.
<https://www.killarneynational-park.ie/explore/history-heritage/>, (2021/06/08)
 - 9) Ibid.
 - 10) Ibid.
 - 11) Former Owners of Muckross House.
<http://www.muckrosshousereseearchlibrary.ie/Owners.php>. (cited 2021/06/08)
 - 12) Ibid.
 - 13) Muckross Home and Abbey.
<http://www.theroseoftralee.com/muckross-house-and-abbey/>, (cited 2021/08/29)
 - 14) Ibid.
 - 15) Former Owners of Muckross House, op.cit., p.5.
 - 16) John Ryan M.(Sean), Deer forests, game shooting and landed estates in the South West of Ireland, 1840-1970, p.183.
<http://hdl.handle.net/10468/1035>, (cited 2021/07/07)
 - 17) Ibid., p.184.
 - 18) Ibid., pp.184-185.
 - 19) History of Killarney, op. cit., p.5.
 - 20) Ryan, op. cit., p.185.
 - 21) Ibid., p.186.
 - 22) Ibid.
 - 23) Ibid., p.187.
 - 24) History of Killarney, op. cit., p.5.
 - 25) Ibid.
 - 26) Joanne Garrison, William Bowers Bourn II, builder of Filoli. From the Daily Journal archives, Aug.7, 2017.
<https://www.smdailyjournal.com/news/local/william-bowers-born>, (cited 2021/08/14)
 - 27) Richard W. Crawford, Book Reviews: Last Bonanza Kings. <https://sandiegohistory.org/journal/1999/april/bonanza/>, (cited 2021/08/08)
 - 28) Filoli's Irish Connection, Irish culture Bay Area.
<https://irishculturebayarea.com/filolis-irish-connection/>, (cited 2021/08/02)
 - 29) Ibid., p.2.
 - 30) Ibid., p.3.
 - 31) Ibid.
 - 32) Muckross Home and Abbey. op. cit.
 - 33) An Taisce-The National Trust For Ireland.
<https://www.antaisce.org/history>, (cited 2021/08/02)
アイルランドのナショナルトラストの最初の総会は1948年9月23日に開催され、初代会長には植物学者で作家のロバート・ロイド・プラガーが選ばれた。
 - 34) 松尾太郎『アイルランド民族のロマンと反逆』論創社、1994年、pp.158-166.
 - 35) 波多野裕造『物語アイルランドの歴史：欧州連合に賭ける“妖精の国”』中央公論新社、1994年、pp.259-268.
 - 36) Shamim Malekmian, Wildlife campaigners slam new multimillion tourism plan for national parks, Green News.ie.
<https://greennews.ie/>, (cited 2021/09/13)
 - 37) Caroline O'Doherty Special Report: Authorities scale new heights in 257million pond bid to protect Ireland's national parks, 2018.7.16.
<https://www.irishexaminer.com/lifestyle/arid-30855394.html>, (cited 2021/09/13)
 - 38) Kevin O'Sullivan, Government announces major review of National Parks & Wildlife Service, 2021.2.4. Irish times.
<https://www.irishtimes.com/news/environment/government-announces-major-review-of-national-parks-wild-service-1.44>, (cited 2021/09/21)

参考文献

- An Taisce: The National Trust For Ireland. <https://www.antaisce.org/history>. (cited 2021/08/02)
- ブリタニカ国際大百科事典小項目事典「アイルランド」の解説
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%AB%E>, (参照 2021/06/08)
- Crawford, Richard W. Book Reviews: Last Bonanza Kings.
<https://sandiegohistory.org/journal/1999/april/bonanza/>, (cited 2021/08/08)
- Filoli's Irish Connection, Irish culture Bay Area.
<https://irishculturebayarea.com/filolis-irish-connection/>, (cited 2021/08/02)
- Former Owners of Muckross House.
<http://www.muckrosshousereseearchlibrary.ie/Owners.php>. (cited 2021/06/08)

- Garrison, Joanne. William Bowers Bourn II, builder of Filoli. From the Daily Journal archives, Aug.7, 2017. <https://www.smdailyjournal.com/news/local/william-bowers-born>, (cited 2021/08/14)
- 波多野裕造『物語アイルランドの歴史：欧州連合に賭ける“妖精の国”』中央公論新社、1994年.
- History of Killarney. <https://moractivetours.com/blog/history-of-killarney/>, (cited 2021/06/08)
- Malekmian, Shamin. Wildlife campaigners slam new multimillion tourism plan for national parks, Green News.ie. <https://greennews.ie/>, (cited 2021/09/13)
- 松尾太郎『アイルランド民族のロマンと反逆』論創社、1994年.
- Muckross Home and Abbey. <http://www.theroseoftralee.com/muckross-house-and-abbey/>, (cited 2021/08/29)
- O'Doherty, Caroline. Special Report: Authorities scale new heights in 257million pond bid to protect Ireland's national parks, 2018.7.16. <https://www.irishexaminer.com/lifestyle/arid-30855394.html>, (cited 2021/09/13)
- O'Sullivan, Kevin. Government announces major review of National Parks & Wildlife Service, 2021.2.4. Irish times. <https://www.irishtimes.com/news/environment/government-announces-major-review-of-national-parks-wild-service-1.44>, (cited 2021/09/21)
- Ryan, John M.(Sean). Deer forests, game shooting and landed estates in the South West of Ireland, 1840-1970. <http://hdl.handle.net/10468/1035>, (cited 2021/07/07)